

主 題：遡られた王の誕生を祝って

聖書箇所：ピリピ人への手紙 2章5－8節

テーマ：誕生された神の御子イエス・キリストがどれほど“遡られた”のかを考える

クリスマスおめでとうございます。今朝、こうして愛する皆さんとともにイエス・キリストの降誕を覚える、そんな礼拝の時間が持てることを心から感謝しています。

これから私たちは神様のことばである聖書から、へりくだられた王の誕生について考えていきたいと思いますが、その前にまず皆さんに質問があります。覚えている方もおられるかと思いますが、3週間前にも同じことを問いかけました。果たして皆さんはきょうこのクリスマスに思いをめぐらせる時に、心から喜んでいるのでしょうか？キリストが人として来られたというこの知らせは、今、あなたの心をおどらせ、賛美にあふれさせているのでしょうか？自分自身に問いかけてみてください。イエス・キリストが誕生されたこの出来事は、今、あなたのうちに大きな喜びをもたらしているのでしょうか？

一番最初のクリスマスのことを思い返してみてください。イエス様の誕生の知らせを耳にした者たちは、例外なく喜びにあふれていました。羊飼いにしろ、博士にしろ、この知らせに心を留めた者たちは、その余りのすばらしさのゆえに感謝をささげずにはいられなかったのです。その様子がルカの福音書に描かれていました。ルカ2：20に「羊飼いたちは、見聞きしたことが、全部御使いの話のとおりだったので、神をあがめ、賛美しながら帰って行った。」とあります。そしてそんなキリストの誕生を祝う喜びの賛美は、この時から絶えることなく2000年たった今もさまざまな形で歌われています。きょう、私たちが賛美した曲もそうです。多くの方が一度は町中で聞いたこともあるような“きよしこの夜”も同じです。古くからこの誕生の知らせは特別なものとして扱われて、人々の間に確かに大きな喜びというものをもたらしてきました。

でも今、あなたにとってはどうでしょう？その本当のすばらしさに心おどらせているのでしょうか？もしかしら、この喜びの知らせが何か当たり前のことのように感じている人もいるかもしれません。私には興味がありません、別に自分には関係のないものだと思っている人もいるかもしれません。だからこそ、改めてこのクリスマス、救い主の誕生がなぜ私たちにとって喜びなのかということと一緒に考えてみましょう。もっと言えば、誕生されたイエス・キリストがそもそもいったいどんなお方だったのかに心を留めてみましょう。今回は、そのことをいつも見るようなクリスマスストーリーが描かれている箇所からではなくて、ピリピ人への手紙2：5－8から見ていきたいと思います。今回初めてこのみことばと一緒に見るという皆さん、どうかよく自分自身のこととして、みことばに耳を傾けてください。そして、この世に誕生されたイエス・キリストが、そもそもいったい誰なのか、そしてその誕生がいかに感謝すべき最高の出来事なのか、そのことを自分のこととして考えてみてください。また、この12月、クリスマスのシリーズとして、すでに2回にわたってこのピリピのみことばと一緒に見てきた皆さん、きょうは特に8節に注目して考えたいと思いますが、どうかよく自分自身のこととして考え続けてください。今まで学んできたことも思い返しながらか、イエス・キリストの誕生が、ご自身をへりくだらされた方のいかに偉大な出来事だったのかを考えてください。このクリスマス、私たちひとりひとりがイエス・キリストの誕生という最高の知らせを喜んで、そのすばらしさを心から祝う者として歩いていく、そんな時となることを心から祈っています。

○遡られた王の誕生：イエス・キリストの三つの姿 6－8節

では、いつものようにまずみことばを見てみましょう。

ピリピ2：5－8

「:5 あなたがたの間では、そのような心構えでいなさい。それはキリスト・イエスのうちにも見られるものです。:6 キリストは神の御姿である方なのに、神のあり方を捨てられないとは考えず、:7 ご自分を無にして、仕える者の姿をとり、人間と同じようになられました。人としての性質をもって現れ、:8 自分を卑しくし、死にまで従い、実に十字架の死にまでも従われました。」

さて、今読んだ箇所には、救い主の誕生について詳しい内容が記されていましたが、この手紙を記したパウロは6－8節の部分で、特にその救い主の姿に焦点を置いていました。この世にお生まれになった救い主、イエス・キリストがいったいどんな存在だったのか、三つの姿を描いています。この時間、それを考えてみましょう。

1. キリストは“すべての初めから”永遠に神様であるお方 6節

まず一つ目の姿が6節に記されていました。「キリストは神の御姿である方なのに、神のあり方を捨てられないとは考えず」と。この箇所に見て取れる一つ目の姿は、キリストはすべての初めから永遠に神様であるお方でした。イエス様は人として地上に来られる前は存在していなかったのではありません。この方は赤ん坊として飼い葉おけに寝かされる前から変わらずにおられた、永遠の神様でした。ヨハネ1:1－2にも「:1 初めに、ことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった。:2 この方は、初めに神とともにおられた。」と記されています。

▶「神の御姿」(ギリシャ語:モルフェー)

またここで、パウロはキリストが「神の御姿である方」なのだと口にしていました。この「御姿」というのはいったい何を意味していたのでしょうか。果たしてパウロはイエス様が実際のところは神様でも何でもないのだけれども、イエス様は神様のような姿をしている方だと、そんなことをここで表そうとしていたのでしょうか？そうではありませんでした。ここで「御姿」と訳されていたことばには、ギリシャ語の“モルフェー”ということばが使われていました。このことばには、「内側の性質と一致する外側の表れ」という意味がありました。言いかえるのであれば、このことばはその人物が内側に持っている性質、本質というものがそのまま外側に現われることです。内側に存在しているものが完全に外に表されることをこのことばは指しているのです。つまりキリストは神の「御姿」なのです、神の“モルフェー”なのですとパウロが口にした時に、パウロが言わんとしたことは、キリストは、間違いなく完全な神様なのだとすることを明らかにしたのです。

イエス様について、世の人たちがいろいろなことを考えることがあります。でもこの方は単なるひとりのすぐれた預言者でもありませんでした。良い教師のひとりでもありませんでした。最高の御使いのひとりでもなければ、神様に限りなく近い存在でもありませんでした。この方は疑いようもなく栄光にあふれた神様ご自身だったのです。みことばは、イエス様は昔も今もこの先も、変わることもないまことの神様なのではとつきりと教えていました。この方こそが世界のすべてが存在するその前から、永遠に存在し、圧倒的な力を持って世界のすべてを創造された大いなる神様だったのです。ヘブル1:2－3にも「:2 ……神は、御子を万物の相続者とし、また御子によって世界を造られました。:3 御子は神の栄光の輝き、また神の本質の完全な現れであり、その力あるみことばによって万物を保っておられます。」と記していました。これが神の御子であるイエス・キリストの姿でした。これがすべての初めから存在しておられた偉大なお方の姿でした。間違いなく、イエス様は永遠の神様でした。ほかのだれとも比べることなどできない輝かしい神様の栄光の輝きでした。でもそんな永遠の神様が人となられたのです。神様である方がそのあり方を捨てられないとは考えずに、仕える者としてこの世に来られたのです。キリストはいったいどれほどご自身をへりくだらせて、この世に来られたのでしょうか？この方はどんなに高いところから、あの飼い葉おけに横になる小さな赤ん坊へとなられたのでしょうか。この世に来るその前に、この方はいったいどんなお方で、そしてどんなことを犠牲にされたのでしょうか。すべての初めから永遠に神様である方、これが救い主として生まれたイエス・キリストの一つ目の姿でした。

2. キリストは“ご自分を無にして”仕える人となられたお方 7節

続けて二つ目の姿が7節に描かれていました。「ご自分を無にして、仕える者の姿をとり、人間と同じようになられました。人としての性質をもって現れ、」と書いていました。ここで見て取れる二つ目の姿は、キリストはご自分を無にして仕える人となられたお方でした。先ほどみことばから見たように、イエス様は完全な神様でした。この方はすべてを造られ、支配されている主権者なるお方でした。だからこそ天においても、地においても、ありとあらゆることをご自身の思いのままにする神様としての権利や特権を持っていたのです。天において、天使たちによってあがめられることも、父なる神様や聖霊なる神様との交わりを楽しむことも、この方は永遠の初めからありとあらゆる権利を持っておられました。その権利を自分のために用いたところで、だれひとりとして、なぜそんなことするのですかと言うこともできない、当然それに値するお方だったのです。この方は神様でした。しかし、それにもかかわらずイエス様はご自分のことをみずからへりくだらせ、一時的にご自身を無とされたのです。7節に「ご自分を無にして」と書いていました。ここで勘違いしてほしくないことは、キリストが「ご自分を無にして」と言われた時、これはこの方が何らかの形で完全な神様でなくなってしまったとか、神様としての一部分を失ってしまったとか、そんなことを意味していたのでは全くないということです。永遠なる神様が人となられる時に、何かを失ってしまったのではありませんでした。この方はどんな時も変わることなく、100%完全な神様であるお方だったのです。たとえもし0.0001%であろうとも、イエス様から神様としての何か失われてしまっていれば、この方はもう神様として存在することはできませんでした。ですから、すべての初めから永遠に存在しておられるキリストは、天におられた時も、また地上にいられた時も一度として完全な神様でなくなったことはなかったのです。その性質を失うことはいっさいなかったのです。

では、「ご自分を無にして」とイエス様が言われた時、これはいったい何を意味していたのでしょうか？この方はどのようにしてご自身を無にされていたのでしょうか？その答えが7節の続きに「仕える者の姿をとり、人間と同じようになられました」と書いてありました。永遠の神様であるイエス様は、仕える者としての姿をとり、人間と同じようになることを通して、ご自身を無にされました。キリストはご自身の神様としての性質を失ったわけではありません。代わりに奴隷の形をとって、完全な人となることによって、ご自分を空しくされたのです。この方はひき算ではなくて、足し算によってご自分を無とされました。でもこれを聞いても、これがどれだけあり得ないことなのか、私たちには想像しがたいかもしれません。何度も言いますが、みことばは私たちに、イエス様は世界の始まる前から永遠に神様であるお方だと教えてくれていました。文字どおり、この方はすべてのことをご自分の意のままにする権威も持っておられました。すべてのものがこの方のものでした。しかし、そんなお方がへりくだって奴隷となられたのです。

この当時、奴隷という存在は、社会の中で最も底辺に位置づけられる人々でした。彼らは自分たちの持ち物や権利をいっさい持つことができず、また、自分自身のいのちでさえも主人の所有物だったのです。奴隷たちは自分たちの望むことなど何もできませんでした。自分が望む場所に行くことさえできませんでした。いっさいの自由がなかったのです。しもべというのは力も何も持っていない、ただ、恥を受けるだけの立場でしかありませんでした。しかし、イエス様はそんな奴隷になられたと言うのです。すべてを持っておられる方が何も持たない者、仕える者になられました。主ご自身もマルコ10:45で「人の子が来たのも、仕えられるためではなく、かえって仕えるためであり、また、多くの人のための、贖いの代価として、自分のいのちを与えるためなのです。」と言っておられました。仕えられるべき存在でした。それだけが値するお方でした。でも、かえって仕える者としていられたのです。

それだけではありません。この方は仕える者としてだけではなくて、完全な人ともなられました。この方は罪を除いて、確かに私たちと全く同じ人としての性質を持つようになられたのです。この世界の

すべてを造られた力ある創造主が、両親の助けを必要とするような無力な小さな赤ん坊になりました。全能の力を持ったお方が、疲れや弱さを覚えて休息を必要とするような者となられました。だれの助けも必要とされない、人の手によって仕えられる必要などいっさいないお方が、飢え、渴きを覚えて、弱さを味わわれました。確かに罪は全く犯しませんでしたが、それでもすべての点で、イエス様は私たちと同じように試みに遭われて、ひどい苦しみに直面することもあったのです。永遠なる神様であったイエス様は、本来であれば、このどれにも値することはありませんでした。そんなお方がみずから進んで、ご自分を無にして仕える者となり、持っている特権をすべて横に置いて、仕える人としてこの世に来られたのです。この方はいったいどれほどご自身をへりくだらせて、この世に来られたのでしょうか？いったいこの方はどれほど高いところから低いところへと下られたのでしょうか。イエス・キリストの誕生を覚える時に、いったいこの方はどんなものを犠牲にしてこの世に来られたのでしょうか？ご自分を無にして仕える人となられた方、これが救い主として生まれたイエス・キリストの二つ目の姿でした。

3. キリストは“従順に”十字架の死にまでも従われたお方 8節

さて、改めてここまで見てきて、救い主として誕生されたイエス・キリストがどんなお方なのかをあなたは本当に知っているでしょうか？この方がどれほど高いところから低いところへと下られたお方なのかを、あなたは本当に知っているでしょうか？これがすべてではありませんでした。今までのを見ただけでも、余りにもすばらしいことが書いてありましたが、最後にもう一つ見て取ることのできる重要な姿があります。8節に「自分を卑しくし、死にまで従い、実に十字架の死にまでも従われました。」と記されていました。三つ目の姿は、キリストは従順に十字架の死にまでも従われた方でした。

▷「自分を卑しくし」

8節の最初に用いられていた「卑しくし」と訳されていることばには、もともと何かを低くするとか、へりくだらせること、名声とか地位を失わせることといった意味が含まれています。また、もっと言えば、この「卑しく」ということばは、何かを低くして恥を与えることも指しています。だとすれば、8節にはすごいことが書いていたと思いませんか？8節の最初には、ご自分を卑しくしと書いていました。つまり、ほかのだれでもないイエス様ご自身が、ご自分のことを低くされたというのです。だれかに強制されたのではありません。いやいやながらそのことをされたのでもありません。この方はみずから進んで恥を受けられました。ご自分を卑しくして従順な者となられたのです。

もちろんこの方のそんな従順さというものは福音書の至るところで見て取ることができます。例えばイエス様はご自分の願いや思いではなくて、父なる神様のみこころに最初から最後まで忠実に従われたお方でした。イエス様自身も何度も何度も口にされるのです。例えば、ヨハネ4：34に「イエスは彼らに言われた。「わたしを遣わした方のみこころを行い、そのみわざを成し遂げることが、わたしの食物です。」と言われました。またヨハネ6：38には「わたしが天から下って来たのは、自分のこころを行うためではなく、わたしを遣わした方のみこころを行うためです。」と。このようにイエス様が地上に来られたのは、自分のしたいことではなくて、父なる神様のみこころに従うことでした。こうしてイエス様は仕えられたのです。でもこのようなイエス様の仕えているということも強いられたからではありませんでした。自分のやりたいことが何もできないと不平不満を口にしていながら、いやいやしもべのように仕えていたのでもなかったのです。この方は完全な神様でありながら、みずからをへりくだらせ、喜んで人として仕え続けられていたのです。

ここで私たちが絶対に忘れてはいけないことがあります。これはもう私たちが何度も何度も見てきたように、このへりくだられたお方は初めから永遠の神様だということです。私たちのような限りある存在ではいっさいありません。この方は力あるすべての主でした。世界を造られた創造主でした。だからこそすべてのものによってあがめられて、仕えられるべき栄光にあふれた存在だったのです。それが値することでした。しかし、そんなお方がご自身をへりくだらせて人として生まれ、何も持たない奴隷と

なられたのです。神様であるからこそ、ご自分の思いのままにすべてをする権威や力を当然持っていたのに、それらを自分のために行使しようとはなさいませんでした。むしろそうではなくて、それらの権利を捨てられないとは考えずに、父なる神様と人々に仕えるしもべとしてご自身を低くされたのです。そしてそんな従順さは、その身にさまざまな痛みやひどい痛みをもたらすことになりました。イエス様が地上に来られた時に、人々は喜んで彼を受け入れていたでしょうか？神の御子がやって来られたと喜んで歓迎して、手厚くもてなしていたでしょうか？そうではありませんでした。王の王であるお方が誕生された時、この方は家畜の餌が入れられるような汚い飼料の中に入れておられました。なぜかという、宿屋にはいる場所がなかったからでした。すべてを持っておられる、偉大な主に宿さえありませんでした。その誕生を迎える大勢の家来さえありませんでした。それだけではありません。イエス様が病などに苦しんでいるような者たちを癒されたり、ご自分が神様であることを人々の前で明らかにされた時、多くのユダヤ人たちは感謝を捧げるのではなく、憎しみを抱いて彼のことを迫害しました。何度も何度もそのいのちを取ろうとしたのです。また、そんな敵対する人たちだけでなく、イエス様は約3年もの間、時間をともして愛を示した自分の弟子たちによっても裏切られ、見捨てられることもありました。間違いなくイエス様は本来では絶対に値しないひどい扱いを受けたのです。キリストは神の御姿である方なのに、もう既にあり得ないほどの犠牲を払ってこの世に来られたのにもかかわらず、人々はこの方を受け入れようとはしませんでした。

自分はこんなに犠牲を払ってきたのに、なぜこんな扱いを受けているのだろう、こんな状況は自分にはふさわしくない、いったいどうして神である私がこんな頑なな人々に仕えなくてはならないのだろう、そう怒りや不満を覚えてもおかしくはなかったでしょう。本来であれば仕えるべき人々が、神の御子を受け入れなかったばかりか、仕えられるべきその方を侮辱して苦しめ、はずかしめを与えていたのです。皆さんならどうですか？自分が大きなものを犠牲にしたと思っている時に、その相手はそんなことは少しも知らないであなたに敵対するものとして歩むのです。いら立って不満を口にすることもありません。しかし、イエス様はそれでもなお初めから変わりませんでした。人として来られたこのお方は、そんな中にもあっても変わらずにご自身を低くされたのです。だれかに強制されてではありません。イエス様はみずから進んでそんな痛みやはずかしめを受けられました。立ち止まってよく考えてみてください。いったいこの方はどんなにご自身のことをへりくだらせたのでしょうか？この方の従順さはどんなに大きな犠牲を伴うものだったのでしょうか？

▶「死にまで従い」

イエス様の従順さはご自身を卑しくして終わりではありませんでした。8節に「自分を卑しくし、死にまで従い」と続くのです。イエス様はただへりくだって、さまざまな痛みやはずかしめを味わわれただけではありませんでした。この方の従順さはその身を死にまでも至らせるものだったのです。イエス様は父なる神様のみこころに忠実に従った結果、ご自身のいのちをささげられました。もちろんこれも強いられてではありませんでした。イエス様がこのように言われます。ヨハネ10：18で「だれも、わたしからいのちを取った者はいません。わたしが自分からいのちを捨てるのです。わたしには、それを捨てる権威があり、それをもう一度得る権威があります。わたしはこの命令をわたしの父から受けたのです。」と。この世界が誕生するよりもはるか昔から永遠に存在する子なる神様が、自分からいのちを捨てられたのです。いつの日か必ず終わりを迎え、いつの日か必ず死を迎える私たちとは全く違います。始まりも終わりもなければ、万物の支配者であるお方がへりくだって、みずから死に従われたのです。これはどれほどあり得ないことなのでしょう？

考えてみてください。みことばは、イエス様のことを何度も何度もこの方がいのちだと教えていました。例えばヨハネ1：4に「この方にいのちがあった。」、ヨハネ6：48でイエス様は「わたしはいのちのパンです」と言われるのです。ヨハネ14：6にも「イエスは彼に言われた。「わたしが道であり、真理であ

り、いのちなのです。」と書いてありました。また、こんないのちの源であるお方には自分の望むままにいのちを与えることのできる権利があることさえ教えられていました。ヨハネ5：21を見れば、「父が死人を生かし、いのちをお与えになるように、子もまた、与えたいと思う者にいのちを与えます。」とあります。これが神の御子であるイエス・キリストの姿でした。しかしそんなご自分のうちにいのちがある方が、ご自分の思いのままにいのちを与えることのできるお方が、みこころに従ってご自身のいのちを喜んで手放されたのです。一体この方はどれほどご自身のことをへりくだらせたのでしょうか。この方の従順さはどれほど、大きな犠牲を伴うものだったのでしょうか。イエス様は、私たちには到底測り知ることのできない犠牲を払って苦しめられました。そして死にまでも従われたのです。

▶「実に十字架の死にまでも従われました」

イエス様の従順さはここで終わりではありませんでした。ご自分を卑しくして、ただ死にまで従ったのでもなかったのです。この方は、実に十字架の死にまでも従われたお方でした。栄光にあふれ、聖く正しい神の御子はただ死んだのではありません。ご自身をあり得ないほどへりくだらせて十字架にかかられました。私たちはこれを聞いてもそのすごさが余りぴんと来ないかもしれません。確かに、実際に十字架にかかっている人を見たことはありませんし、今、私たちの周りには、いろいろなところで十字架がデザインされている服やネックレスを見ることができます。ある意味、私たちの周りには十字架があふれています。しかし、この当時は決してそうではありませんでした。だれも十字架など身につけて道を歩くことはしませんでした。教会でさえ十字架を掲げようともしませんでした。なぜだと思えます？それは十字架というものがただ残酷で、最も恥ずべき死の象徴でしかなかったからでした。十字架を身に着けることなどもってのほか、ただ一言口にすることでさえ忌み嫌われるような存在でした。

この処刑方法が余りにも残酷で、残虐で、最低のものであったからこそ、ローマの市民たちは法律によってこの十字架刑から守られていました。どれだけひどい罪を犯していたとしても、ローマの法律が市民に対する十字架刑を禁じていたのです。このような十字架刑というのは、社会の中で忌み嫌われ、さげすまれている奴隷や凶悪な犯罪者、ローマに敵対するような裏切り者にのみ与えられるものでした。かつて古代ローマの政治家、哲学者であったキケロという人物も、十字架についてこんなことばを残しています。「ローマ市民を縛ることは犯罪であり、鞭打つことは邪悪であり、死刑にすることはほとんど親殺しと同じである。では、十字架に付けることはどうであろう？その罪深い行為は、どんな酷い言葉でも十分に表現することなどできない。」と。またこうも言います。「(十字架刑は)最も残酷で、極めて不快な罰である。…十字架の名をローマ市民の身体からだけでなく、その考え、目、耳からさえ遠ざけよ。」と。また、フレドリック・ファーラーという人物もこんなことばを残していました。「十字架刑による死は、めまい、痙攣、渴き、飢え、不眠、発熱、恥、恥辱、絶え間ない激痛、恐怖に壊死といった、苦痛と死が持つ恐ろしさや凄惨さの全てを含んでいるように思われます。その全てが耐えられる限界まで強められていながらも、苦しむ受刑者が意識を失う一歩手前で止まっているのです。…一つははっきりしていることがあります。一世紀の処刑は、現在のものとは異なり、迅速で苦痛の伴わない死や犯罪者の尊厳を保つことを求めてはいなかったということです。それどころか、犯罪者を完全に辱める、激痛を伴う拷問が行われたのです。このことを理解することは、キリストの死の苦しみを理解する上で重要なことなのです。」と。多くの医者たちは、あらゆる死刑方法の中で、この十字架刑こそが歴史的に最も残酷なものであると考えています。両手首、両足首をくぎで十字架に打ちつけられた者たちは、すぐに死ぬことはありませんでした。痛みや傷にもだえ苦しみながら、十字架に数日の間つるされるのです。町の人たちがその様子を見に来て嘲笑しました。そしてそんなはずかしめを受ける中であって、次第に時間の経過とともに増し加わってくる痛みや疲れによって、自分が自分の体を支えられなくなって、呼吸困難に陥り、最後は死んでいくのです。その余りの苦しさのゆえに、多くの受刑者たちは途中で発狂してしまうようなものでした。こんな絶え間のない激痛を与える残酷で、人々から忌み嫌われて

いるような最悪の十字架刑。そんな十字架にイエス様はかかられたのです。いっさいの罪もない、完全でいつも正しい、そんな神の御子が十字架の上で死なれたのです。すべての権利や力を持っておられた栄光に輝く王様が、へりくだって何も持たない奴隷となっただけではなくて、十字架の死にまでも従われたのです。いったいどんなにこの方はご自身のことをへりくだらせたのでしょうか。どんなに本来値しないような痛みや苦しみをその身に受けて、みずから犠牲になられたのでしょうか。

◎十字架のもたらす苦しみ

でも驚くべきことは、そんな肉体的な苦しみが、十字架のもたらす苦しみのすべてではなかったということです。もっと言うのであれば、そんな激痛やはずかしめや拷問というものは、この刑の苦しみの一部でしかありませんでした。イエス様が受けた苦痛の最悪の部分ではなかったのです。ではいったい何が最悪だったのかというと、みことばはこのように教えていました。申命記21：23に「木につるされた者は、神にのろわれた者だからである。」、ガラテヤ3：13にも「キリストは、私たちのためにのろわれたものとなって、私たちを律法ののろいから贖い出してくださいました。なぜなら、「木にかけられる者はすべてのろわれたものである」と書いてあるからです。」とあります。イエス様の受けた最もひどい苦しみは、神様によってのろわれた者となることでした。永遠の初めから神の御姿としておられたお方が十字架で死なれました。ほめたたえられるべき神の御子が、からだに激痛を覚えて、人々からははずかしめを受ける、その中にあって、何よりも父なる神様からのろわれた者とされたのです。何度も言いますけれども、この方は初めから変わらない神様でした。人となられた時も変わらない神の栄光の輝きでした。本来であれば、ただ誉れと賛美にのみ値するようなお方だったのです。父なる神様ののろいや御怒りを味わう必要などいっさいありませんでした。しかし、この方はそんなご自分のことをいっさい顧みることなく、みずから心から喜んで十字架にかかられたのです。罪の全くないお方が、だれもこの方のうちに過ちも失敗も見出せない完璧なお方が、永遠の初めから持つておられた父なる神様との交わりから引き離されてその身に御怒りを受けられたのです。これがどれほど苦しいものだったのかは、私たちには到底想像もできません。測り知ることもできない苦しみでした。だからこそ、イエス様は十字架で叫ばれたのです。「わが神、わが神。どうしてわたしをお見捨てになったのですか」と。神の御子であるそのお方は、十字架にかかられました。いったいどれほどの苦しみを味わわれたのでしょうか。神のひとり子はどんなに、大きな犠牲をみずから進んで払ってくださったのでしょうか。

私たちが覚えていなければいけないことがあります。それは、このようにしてイエス様が人として、この世に来られて、苦しまれ、そして十字架の死にでも従われたのは、私たちのためだったということです。私やあなたのその罪が、この方を十字架につけました。いったいどういうことか、イエス様についてこのことを教えている同じみことばは、生まれながらの私たちがみんな例外なく神様のさばきに値する罪人であることを教えていました。エペソ2：1-3に「:1 あなたがたは自分の罪過と罪との中に死んでいた者であって、:2 そのころは、それらの罪の中にあってこの世の流れに従い、空中の権威を持つ支配者として今も不従順の子らの中に働いている霊に従って、歩んでいました。:3 私たちもみな、かつては不従順の子らの中にあって、自分の肉の欲の中に生き、肉と心の望むままを行い、ほかの人たちと同じように、生まれながら御怒りを受けるべき子らでした。」とあります。生まれながらの私たちはみんな、例外なく創造主なる神様に逆らって生きていて御怒りを受けるべき子らでした。今もなおいっさいの汚れや罪を赦すことなどなさらぬ、罪に対して怒りを燃やされている聖い神様によって、さばかれて当然の存在でした。私もあなたも本来であれば、自分の罪のゆえに永遠に滅ぼされて地獄で苦しんで当然しかるべき存在でした。

しかし、そんな私たちに対して、神様が測り知れないほどのあわれみを示してくださったのです。ローマ5：8に記されておりました。「しかし私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死んでくださったことにより、神は私たちに対するご自身の愛を明らかにしておられます。」と言われるのです。イエス・キリストは完全な神様として、また完全な人としてこの世に来られました。そしてこの方が当然、

私たちの上に注がれるべき罪の罰を身代わりとなって、十字架の上で受けてくださったのです。罪に対して燃え上がる神様の正しい御怒りを、この方が代わりになだめてくださったのです。私たちにはどうすることもできなかった罪の問題を、本来であれば受ける必要などない苦しみや恥を味わって、神の御子が犠牲を払い、解決してくださいました。私たちには決して背負うことのできない罪を、またその苦しみやすべてのものをこの方が代わりに十字架で負って死んでくださったのです。これが、イエス様が救い主として来られた理由でした。だからこそ、もしまだ今この方を自分の救い主として知らない方がおられるのであれば、そんなあなたは今なお罪の中に死んでいて、永遠の滅びへと今まさに一日一日近づいているということを知ってください。でもまだ救いがあります。だからきょうという日、私やあなたのような罪人のために、ご自分のいのちを捨ててくださった、ささげてくださったあわれみ深い方のあわれみを求めてください。自分の罪深さを認めて、悔い改めて主イエス・キリストを自分の救い主として信じ受け入れてください。私たちの良い行いも力や知恵といったものも、自分自身を救うことなど絶対にできません。だからこそ、ただキリストの死と復活によるその救いを、赦しを求めてください。あり得ないほどの犠牲を払って、喜んで十字架の死にまでも従われたそんな偉大な救い主を、あなたも心から信じるのであれば、救いが与えられると神様は約束してくださっていました。クリスマスはそんな救い主、イエス・キリストが来られたことをお祝いする日です。神の御子であるその方は、神の御姿である方なのに、そのあり方を捨てられないとは考えずに、人として無力な赤ん坊として生まれました。飼葉おけで両親の手をつかんでいたその小さな手は、後に十字架の木に打ちつけられることになりました。しかし、栄光にあふれていた永遠の王が、へりくだられた王として生まれ、救いのみわざを完成されたのです。どうかこのクリスマス、そんな偉大なお方を、ひとりひとりが自分のこととして知ってください。この方のうちに本当の喜びがあります。救い主が誕生されたというこの最高の知らせを心から喜んで祝う者へと変えられることを心から祈っています。

また最後に、もうすでにこの救い主を自分の主として歩まれている兄弟姉妹の皆さん、改めて私たちがみことばを通して、救い主の姿に思いをめぐらせる時に、人として来られた神の御子が、いったいどんなお方なのかということに心を留める時に、私たちはこのクリスマスを本当に喜んでいるでしょうか？キリストが人として来られたという最高の知らせは、今、あなたの心のうちにあふれんばかりの賛美をもたらしているのでしょうか？パウロは6－8節で、キリストの姿を描いていたのですけれども、これにはある明確な目的があったのです。きょう私たちが触れていない5節に「あなたがたの間では、そのような心構えでいなさい。それはキリスト・イエスのうちにも見られるものです。」と書いてありました。パウロがこのことばを記した目的は、神の家族として生きている信仰者ひとりひとりに対して、キリスト・イエスのうちに見られるその心構えを持って歩むようにと求めることでした。もっと言えば、今、私たちがまさに見た神の御姿である方が人として来られたこと、神の御子、へりくだられたこの方の模範に倣って、わたしたちも互いに仕え合っていくことが、成長していくことが責任として求められていたのです。

だとすれば、果たして私たちの持っている謙遜は、イエス様のうちに見られるようなものでしょうか？みことばを見る時に、神様が私たちに求めているのは、私たちが考えるようなへりくだりでも謙遜でもありません。イエス・キリストのうちに見られるその心構えでいなさい、いったいそれがどんなものかを6－8節で私たちに教えられていました。自分の歩みを振り返ってみましょう。私たちの愛するイエス様は、確かにあり得ないほどの犠牲を払われました。ご自身をへりくだらせたお方でした。人として来られる前に持っていたすべての富や栄光や神様としての権利や力、そういったすべてのものを無にして、代わりに人の性質をとって、弱さや苦しみを味わわれました。本来であれば、ご自分こそが仕えられるべき神様なのに、みずから進んで父なる神様とのみこころと人にとに仕える者、奴隷となられたのです。そんな従順さは、ご自分を実に十字架の死にまでも至らせたのです。この方は余りにも高い

ところから余りにも低いところへご自身をへりくだらせたお方でした。間違いなく、この方は自分の益のためではなく、ほかの人の益のためにご自身をささげられたお方でした。そしてこの方がみずからそのような犠牲を払ってくださったことによって、本来であれば、ただ永遠のさばきだけが値する私たちに、ただ恵みによって救いが与えられたのです。この方の大きな愛のゆえに、罪深い私たちのような者が、今、神の子どもとして歩むことができるのです。

こんなにもへりくだられた王の姿を目の当たりにするのであれば、あなたはどうか応答するでしょうか？ 測り知ることのできない犠牲を喜んで払ってくださった救い主のために、私たちは何を喜んで犠牲にしましょう？ 仕える者として、実に十字架にまでも従われて私たちに救いをもたらしてくださった方の犠牲を覚えるのであれば、私たちはいったいどれほど主に従い、お互いにも仕えようとしているでしょうか。クリスマスは私たちの愛する救い主、神の御子イエス・キリストがへりくだって人となられたことをお祝いする日です。私たちにとって最高の救い主がやって来てくださいました。その最高の知らせを心に留めて、きょうだけではなくて、いつも喜び、賛美をもって歩む者として、ともに成長していきましょう。